

General Symposium

📅 Thu. Aug 28, 2025 5:10 PM - 7:10 PM JST | Thu. Aug 28, 2025 8:10 AM - 10:10 AM UTC 🏠 Main arena(Sports building 2F)

[2a107-09] Reconsidering the Value of Corporeality: Exploring Redundancy and Invisibility

Chair:Chiaki Ohtaka, Kanae Sano Designated Debater:Tadao Isaka

テクノロジーの進化に伴い、現代社会は効率性が重視され、AIの発展によって疑問は瞬時に解決されるようになった。特にコロナ禍以降、この傾向は加速し、スマートデバイスを通じて心拍や運動量を簡単に把握できるなど、日常生活における身体情報の管理も容易になった。スポーツにおいても、リアルタイムでスキルのフィードバックを受けられるなど、最先端のツールを活用する若手研究者・実践家も増えている。一方で、こうしたデジタル化が進む社会において、見落とされてきたもの、フォーカスされてこなかった大事な要素があるのではないだろうか。体育・スポーツ科学において「身体」そのものが置き去りにされていないか、今一度立ち止まって考える必要がある。

本シンポジウムでは、体育・スポーツ科学における「身体性」の価値や本質について、一見効率でなく無駄と捉えられかねない冗長性や、定量的な評価が難しい身体感覚や経験値などの不可視性を手がかりに再考する。まず、運動制御における身体の冗長性に注目する。ヒトの運動は多くの自由度を持つ関節の制御によって実現され、冗長性は運動を複雑にする一方で、柔軟性や安定性を高める重要な特性でもある。この冗長性がもたらす豊かさを通じて、身体性の再認識を試みる。次に、学校体育における評価軸について議論する。現在、スポーツ科学や学校体育では、パフォーマンスの出来栄や技術の習得が重視され、「できる」と「できない」、強弱や速遅による評価がマジョリティである。しかし、技やスキルを習得する過程では、試行錯誤や遠回りをする中で身体と向き合う経験が重要となる。「できない」ことの面白さや、そこから生まれる気づきもまた、体育・スポーツ科学における貴重な価値である。本シンポジウムでは、こうした冗長性や不可視性の観点から身体性を多角的に考察し、これからの体育・スポーツ科学において多様な価値を提供する可能性を探る。

[本部企画-S2-1]

Is “Being able” the only right answer?

Bodily possibilities and diversity

*Ai Tanaka¹ (1. Tokyo Gakugei University)

[本部企画-S2-2]

Is “Success” the only right answer?

Nonlinear science of skill acquisition

*Masahiro Okano¹ (1. Kobe University)

[本部企画-S2-3]

Is the fastest and shortest route the best?

The joy of detours in running and the use of GPS art

*Yuichi Saito¹ (1. Naruto University of Education)

General Symposium

📅 Thu. Aug 28, 2025 5:10 PM - 7:10 PM JST | Thu. Aug 28, 2025 8:10 AM - 10:10 AM UTC 🏢 Main arena(Sports building 2F)

[2a107-09] Reconsidering the Value of Corporeality: Exploring Redundancy and Invisibility

Chair:Chiaki Ohtaka, Kanae Sano Designated Debater:Tadao Isaka

[本部企画-S2-1] Is “Being able” the only right answer?

Bodily possibilities and diversity

*Ai Tanaka¹ (1. Tokyo Gakugei University)

＜演者略歴＞

東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、修了。博士（教育学）。武蔵大学人文学部、明星大学教育学部を経て、現職。専門は、体育哲学、身体教育学。

「身体」とはなにか、そして、私たちは「身体」をどのように捉えるべきか。この問い立てに対し、本シンポジウムに掲げられている「冗長性」や「不可視性」は、有効な視点であるように思われる。演者の立場からは、現象学という学問の知見を借りながらこの問いについて再考を試みたい。

考察の手がかりの一つとして、「身体的可能感」を取り上げる。この概念は、体育やスポーツ実践における「できる」か「できない」かの現象のうち、「できない」から「できる」までの過程で、無自覚のうちに本人が抱く感じを指す。この概念を、通常認識されている「できる」との対比から〈できる〉と表記すれば、この〈できる〉は、人間が積極的に行動を起こす際のいわゆる「意欲」にも影響を及ぼすと考えられる。また、これらのことを学校教育という枠組みの中で評価することの難しさについても、とくに「不可視性」との関係から問題提起したい。

また、上記の議論に加え、「できる」ことの価値を認めつつも、「できない」ことにも「人と人を結び付ける」という独自の意味があることについて、スポーツやパラスポーツの実践場面にみられる能力志向という観点から議論を展開したい。

General Symposium

📅 Thu. Aug 28, 2025 5:10 PM - 7:10 PM JST | Thu. Aug 28, 2025 8:10 AM - 10:10 AM UTC 🏢 Main arena(Sports building 2F)

[2a107-09] Reconsidering the Value of Corporeality: Exploring Redundancy and Invisibility

Chair:Chiaki Ohtaka, Kanae Sano Designated Debater:Tadao Isaka

[本部企画-S2-2] Is “Success” the only right answer?

Nonlinear science of skill acquisition

*Masahiro Okano¹ (1. Kobe University)

<演者略歴>

東京大学大学院総合文化研究科、修了。博士（学術）。立命館大学グローバル・イノベーション研究機構、同大学総合科学技術研究機構、日本学術振興会特別研究員を経て、現職。専門は、認知科学、パフォーマンス科学。

「非線形科学」とは、物理学や数学のいわゆる「複雑系」「カオス」などの研究に端を発する領域である。非線形科学ではしばしば、システムの構成要素が相互に作用し合うことを通して、複雑でありながら秩序だった振る舞いがシステム全体として生じるという現象（パターン形成、自己組織化）が扱われる。

人間（他の生き物も）の身体運動も言うまでもなく、筋骨格系、神経系、呼吸器系、循環器系、内分泌系、さらには外部環境といった、相互作用し合う構成要素からなるシステムである。したがって、身体運動が「うまくいく」とは、これらの要素間の相互作用の結果として、システム全体が、目的を果たすのに適した振る舞いをしている状態と言い換えることができる。

非線形科学というメガネを通して熟達化のプロセスを眺めると、熟達化とは身体・環境システムが現在示している秩序が、さらに目的に適した別の秩序に移り変わる過程だという捉え方ができる。この秩序が移行変わる過程では「臨界ゆらぎ」という、システムの状態が不安定になる局面が観察されることが知られている。

これらを踏まえると、既存の秩序を維持し続けようとする、すなわち「うまくいく」状態を維持し続けようとすることは、長期的に見て正解といえるのだろうか、という疑問が湧く。このような観点から、冗長性・不可視性を手がかりに、身体性について議論を深めるきっかけとなる話題を提供できれば幸いである。

General Symposium

📅 Thu. Aug 28, 2025 5:10 PM - 7:10 PM JST | Thu. Aug 28, 2025 8:10 AM - 10:10 AM UTC 🏢 Main arena(Sports building 2F)

[2a107-09] Reconsidering the Value of Corporeality: Exploring Redundancy and Invisibility

Chair:Chiaki Ohtaka, Kanae Sano Designated Debater:Tadao Isaka

[本部企画-S2-3] Is the fastest and shortest route the best?

The joy of detours in running and the use of GPS art

*Yuichi Saito¹ (1. Naruto University of Education)

＜演者略歴＞

東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、修了。博士（教育学）。小学校、中学および高等学校、環太平洋大学体育学部を経て、2023年より現職。専門は、体育科教育学。

学校体育における持久走や長距離走は、児童生徒の体力維持・向上において一定程度の効果が認められている。しかし一方で、走行距離やタイムといった結果が重視されるあまり、子どもたちからの人気は依然として低く、運動の過程における楽しさが見過ごされがちである。特に限られた場所で実施される授業では、効率よくゴールすることが求められ、A地点からB地点へいかに速く到達するかが重要視される結果、移動過程の価値が軽視される傾向にある。

本シンポジウムでは、こうした「最速・最短」志向が持久走・長距離走授業に与える影響を考察するとともに、ランニングアプリのGPSトラッキング機能を用いて地図上に文字や絵を描く「GPSアート」を取り上げる。GPSアートを楽しむランナーがどのようにその魅力を感じているのかを探ることで、走行経路を工夫しながら目的地に向かうプロセスそのものに楽しさがあることを示す。さらに、GPSアートの実践がランナーの認識にどのような変容をもたらすかを考察し、従来の持久走・長距離走授業が抱える課題と、その改善に向けた視点を提案する。